



## 【9】保存の方法…長浜と奈良町

### 1 もう一つの町並み保存

20年前、白壁地区の町並みの保存を考えていたとき、その政策を学んだいくつかの街がありました。なかでも滋賀県の長浜や、奈良県の奈良町は、大切な事例でした。

古い町並みを保存する場合、だれが、どのような方法で保存するかは重要な問題です。これまで見てきた今井町や有松など「重伝建」志向の町は、補助金ではありますが、基本的には自治体や国(以下、行政)が法で保存するものだといえます。

しかし、それほどの施設や密度がなくても、その古い街並みを保存していくことが、地域の歴史や物語の上で大切な所はたくさんあります。当時は、全国的にそれらの試みが始められた時期でもありました。その中で、長浜や奈良町はその先端的な試みだったのです。

今回は、重伝建の指定ではなく町並み保存に取り組んだ、長浜と奈良町の町並み保存を見てみたいと思います。

### 2 歴史を生かした街づくり

#### (1)長浜の「黒壁スクエア」

長浜は秀吉が築城した城下町です。江戸時代に廃城になりましたが、その後も北国街道の宿場町として栄えました。しかし戦後の高度成長期に、国道のバイパス化や郊外型大型店舗の登場で街の中心部が落ち込んでいました。



図1 長浜の「黒壁スクエア」(真ん中部分)。  
原点となった黒壁銀行はガラス館の所

この町が歴史的な建物の保存で動き始めたのは、昭和62年、北国街道沿いにある通称「黒壁銀行」と呼ばれた旧国立第百三十銀行が売却された時でした。地元有志で買戻し、商店街活性化の拠点にしようという動きが起こりました。そのため第3セクター「黒壁」が設立されましたが、注目を集めたのが民間主導です。とりわけユニークだったのは、地元の資源志向ではなくて時代のニーズ志向だったことでした。様々な事業が検討されましたが、結局、地元には何もなかった「ガラス工芸」が選ばれたのです。

ところがこれが当たりました。「黒壁スクエア」と呼ぶ一角を中心に、次々に分館を広げていくことになりました(図1)。各店舗は郊外大型店との差別化を意識したテナント選定を行い、定常的な集客のあるものが選ばれました。現在では、分館は30店舗を越えています。そして長浜の入込客数も年間10万人台から200万人を超えるまでに押し上げたのです。黒壁スクエアは観光と産業のまちづくりとして大きな成功を収めました。

このように、長浜の町並み保存は「黒壁」という企業の力によるところが大きく、また黒壁スクエアへの一点集中型です。このため、事業主体もなく、分散型である白壁地区とは条件が少し違っていました。しかし民間の力の活用等、学ぶところのある試みでした。

## (2) 奈良町の町並み保存

奈良町は、奈良市の真ん中にあり、元興寺の昔の境内だった所が中心です(図2)。元興寺は、わが国最初の寺院である飛鳥の法興寺(飛鳥寺)が平城遷都によって移された寺です。が、平安遷都後は衰えていき、1451年の焼

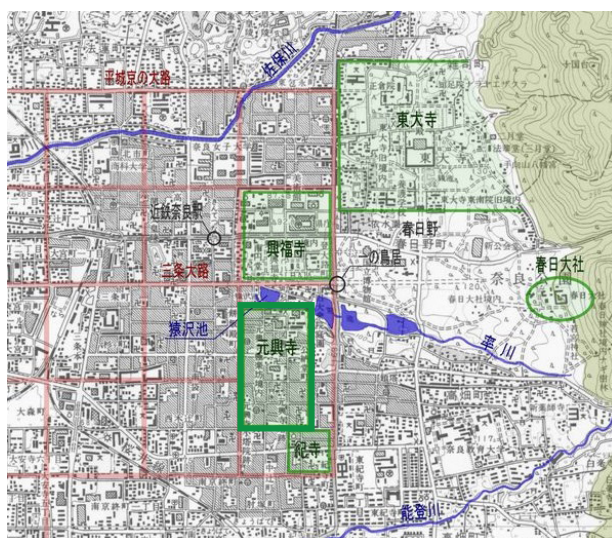


図2 平城京外京の配置。元興寺は、興福寺の南側を占めた

失の後、そこが、筆、墨、蚊帳等の商工業の街に変わっていったのです。ところがその町並みは第2次大戦で戦災に遭わなかったため、今日まで、旧い姿で残ることになりました。

昭和50年代の中ごろ、市民団体の「奈良まちづくりセンター」ができ、歴史的な環境の保全を訴え始めました。そして平成元年、奈良市の委託に対し、「博物館構想」を提案したのです。そこで市は、次のような市の集客施設を地区内に集中して展開することになりました(図3)。

- ①なら工芸館
- ②ならまち振興館
- ③音声館
- ④奈良市史料保存館
- ⑤ならまち格子の家

中には現代的な建物もありますが、既存のもののは古い姿で保存・活用されています。

奈良町は、近鉄やJRの奈良駅からも近く、興福寺をはさんで三条通の斜め向かい側という絶好の立地条件にあります。そこで、寺社観光にすこし飽きた人たちが飲食が目当ての人たちが流れ込み、新しい観光地を形成することになったのです。





図3 奈良町の中心部。  
赤丸が旧元興寺の遺跡(3か所)

この奈良町は、行政とNPOとが力を合わせていること、居住混在の分散型であることなど白壁地区との共通点も多く、観光上の立地は少し違いますが、学ぶことの多い町並み保存でした。

### (3)白壁地区の課題

さてこれらの事例を見つ、白壁地区の町並みの「保存」をどのようなルールで行うかが議論されました。今井町や有松は、苦勞しながらも伝統的建造物群(以下、伝建)の指定を目指し、公的に保存と規制をする道を選びました。しかし、長浜では民間(3セク)の力で、奈良町ではNPOと行政の力で、保存が行われています。奈良町も、平成の初め頃に伝建指定が試みられたようですが、住民の反対で指定には至りませんでした。その代り、特別

の都市景観条例を制定することによって町屋建築の修景に市独自の補助をしています(年間10件ペース)。

白壁地区の場合も、選択は、まず、行政で支えるか民間でおこなうか、ということになりました。しかし行政としては、文化財相当のものならばともかく、市内で次々と出てくるであろう古い建築物の保存の要請に応えることはできません。しかし一方では、民間の力のできるかどうかは、その主体もなく未知数でした。

白壁地区の町並み保存は、様々な他都市の事例を学びつつも、とりあえずは、民間の力を掘り起し、ケースバイケースで進めるしか方策がなかったのです。

## 3 紀行 奈良町

### … 行政の役割 …

それでは、町並み保存を学んだ奈良市の「奈良町」を、歩いてみましょう。近鉄の奈良駅からは南に、JRの奈良駅からは東に歩き、猿沢の池の畔に出ます。

#### 〈猿沢の池から〉

猿沢の池の西側の堤の道は、興福寺の南円堂の階段の下から始まります。この道は、奈良時代はまっすぐ藤原京に通じる中ッ道でした。平安時代以降は上街道とされて、長谷寺



猿沢の池の向こうが奈良町(元興寺跡)。  
左側に見える道は上街道



奈良町の中心を東西に貫く大通り。  
開設まで長い時間がかかった

～伊勢神宮へとつながる道になります。その道を軸に、奈良時代、池の向こうに元興寺という大きな寺がつくられたのです。

堤を通り、旧道に入ると小さな橋を渡り、商店街に入ります。ここはもう奈良町、元興寺の境内だった所です。猿田彦神社等のある細い商店街を抜けると広い大通りに出ます。この通りは奈良町地区にある唯一の幹線道路です。街を分断することから反対があり、長い時間をかけて完成したものです。角に民間が経営する「奈良町情報館」があります。

左に曲がり1本目を右に進むと、現在残る元興寺です。世界遺産に指定された鎌倉時代の建築ですが、西側は僧房の昔の形を伝え、当初の古材や古瓦が使われています。



現在の元興寺。裏に回ると昔の姿の僧房がある。  
瓦等には古いものが混じる

寺の南で右に曲がり、1本行くと奈良町の中心で、上街道が通り、奈良町物語館のある一角です。実はここに昔の元興寺の本堂がありました。物語館は、今は貸スペースですが、最初にこの奈良町の保存を訴えたNPOの拠点です。周りにはいろいろな施設があります



奈良町の中心にある「奈良町物語館」。  
ここからまちの保存運動が始まった



物語館の横に市で購入、公開された  
「奈良町にぎわい館」。大正の建築

が、西北角の建物は、大正の建築ですが、売却されようとしていたものを奈良市が取得し、「奈良町にぎわいの家」としたものです。

バックして物語館の東の道を南に進みます。左側にも元興寺という寺がありますが、ここには東塔の礎石が残っています。その次の道がカギ型になったところが、昔の南大門跡です。門の南には、花園院等の寺の関連施設がありました。そこを南に進むと、左側に奈良



「ならまち格子の家」。  
奈良町の古い町屋スタイルを公開している



市の「ならまち格子の家」があります。奈良町の伝統的な町屋が修理、保存されており、内部も見学できます。さらに進むと奈良市の「ならまち振興館」があり、貸室スペースでしたが、今改修中です。すぐ先の大通りが奈良町の南端です。

#### 〈奈良駅へ〉

広い道を西に、1本目を右に曲がると再び奈良町の町並みになります。まっすぐな道には結構<sup>あうとつ</sup>凹凸があります。一つ目の坂を越えて下りになると、左に平成6年にできた奈良市の「音声館」があります。東大寺の音声菩薩から、歌声による人づくりをテーマに生まれました。次の坂を上り、左側の道を少し行った所に「奈良町からくりおもちゃ館」があります。ここも古い町屋を活用したものです。

戻って先ほどの道を北に進むと右に、「奈良市史料保存館」があります。奈良町の古い



「奈良市音声館」付近の町並み。  
細い通りにアップダウンがある



「奈良町資料保存館」では、奈良町の歴史を  
展示・紹介している

姿を紹介しており、ここも町屋を活用しました。その向こうは奈良出身の書道大家の美術館があります。先ほど通った大通りに戻った所で左手に行くくと右に「なら工芸館」があります。ここは近代的な建物で、奈良工芸の振興拠点とされます。このように、奈良市は奈良町に集中して中小規模の集客施設を設置することによって、奈良町の活性化を図ろうとしているのでしょう。

南北の通りに戻って北に進むと、アーケード街になり、下御門とか餅飯殿という、魅力的な商店街を過ぎて三条通になります。北に行けば近鉄、西に行けばJRの奈良駅です。

## 4 「文化のみち」の意味

佐助邸を保存してから2年弱。町並みの保存方法をあれこれと勉強しましたが、その方向はなかなか見いだせないままでした。一応、保存要綱はありましたが受け身で、まだ市の政策というほどでもありませんでした。どちらかといえば、先の見通しもないまま、ただ、がむしゃらに進んでいたといえます。

ところが、平成9年春の市長交代の選挙がありました。そのとき、突然、選挙公約の中に、「文化の道」という言葉が出てきました。東区の名古屋城から徳川美術館に至る一帯を文化の道として整備するというものです。新市長は教育委員会出身だったため、文化政策を探していて盛り込まれたようです。

新しい市長の誕生で、白壁地区の整備が正式な政策になりました。その後、政策の幅を広げるため、「道」を「みち」に改め、「文化のみち」として、新しい政策の一つとして出発することになったのです。白壁地区の町並み保存は、方向の定まらぬまま、とにかく市の政策のレールに乗りました。

〈主な参考文献〉

①同市編『新奈良町にぎわい構想(案)』(2015、奈良市)